



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集 緑の力

vol. 12 | 季刊 夏
2009





特集

緑の力

その土地の人々の、
記憶に刻み込まれた緑。
その場所を訪れる人たちに、愛される緑。
緑はいつも、人とのかかわりを通して姿を変え、
育まれ、やすらぎを与えていく。
いつも何気なく見ている緑に、まなざしを向け、
思いをはせてみよう。

[特集] 緑の力

02 里山発見
身近な緑はこんなに清々しい場所だった。
案内する人 富田 啓介さん

05 INAXライブミュージアム
樹の声を聴き、樹に寄り添う
岡 佐紀子さん

LIVE REPORT

07 開催報告
常滑 春の山車祭り
6台の山車がライブミュージアムに勢揃い!
モザイクアートコンテスト2009

LIVE SCHEDULE

08 これからの催し

CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS
LETTER

vol. 12 季刊夏
2009

表紙写真

世界のタイル博物館の裏手にある「とこなめトイレパーク」。土管とケーブル管でできたパイプメント、ユニークなデザインの池とせせらぎ、光や風をとりこんだ快適なトイレ、そしてそれらを包み込む優しい緑。常滑らしい、くつろげる空間です。設計は象設計集団。(2009.5.14)

表紙撮影：加藤弘一



常滑から*

11

常滑屋

陶磁器会館の南、木橋をくぐったあたりに果壁の風情ある構えの店がある。「常滑屋」と書かれた暖簾が、かつてこの地でつくられた焼酎瓶に植えられた瑞々しい野の草花に目を奪われて足を止める人も多い。

店主、伊藤悦子さんが仲間と店を開いたのは14年前。窯業で活気ついた大正昭和の熱気を閉じ込め、なおひっそりと往時を偲ばせる風景を残す常滑に空港の話が持ち上がり、大きな変化が起ころうとしていた。街の景観を守るには、まず地元が街の魅力を知らなければ。そう考えて始めたのが「常滑屋」だ。土管工場を改装した空間にやきものを並べ、展示会を開いて人が集う場所をつくった。周囲からは失敗するからやめなさいと反対もされた。常滑観光の先陣をきった「常滑屋」を自当りに、毎日多くの人が訪れる。「若者が夢を語るような街にしたかった」と伊藤さんは話す。夕方、暖簾をしまった後も次々と地元の人を訪れる。常滑の「ものづくり」たちの拠り所として、店はいつまでも賑やかだ。

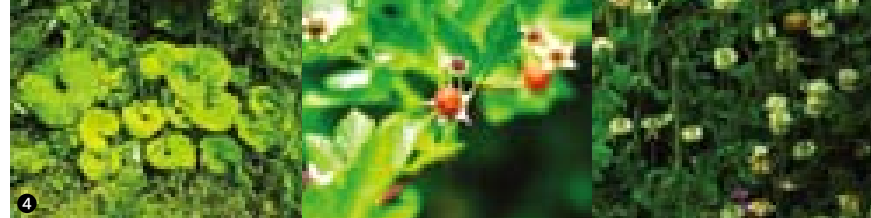
尾之内 明美 (広報担当)

* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

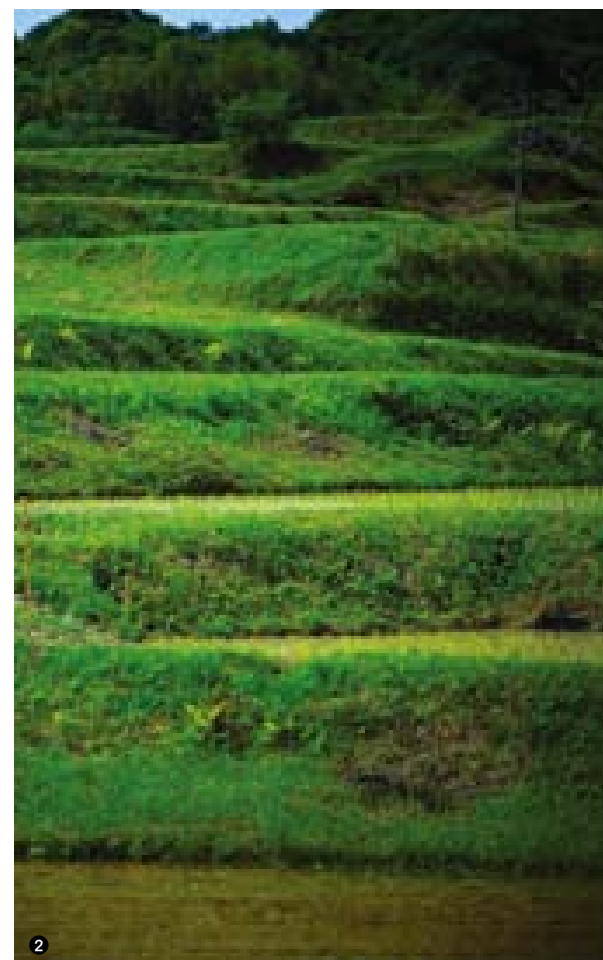
里山発見

身近な緑はこんなに清々しい場所だった。

里山—— 一昔前まで、都市を少し離ればどこにでも広がっていた風景。段々の田んぼの向こうにこんもりとした雑木林。薪を採ったり炭を焼いたり、落ち葉や山菜を採ったり。生活に必要な恵みを受け、さまざまに利用してきた場所。それが今、意識して「里山」と呼ばないと、いつのまにか消えてしまう。かつて有数の里山地帯だった知多半島。しかしその姿は水田の圃場整備と丘陵地開発で大きく変わった。今、身近に残る里山。その姿に触れたくて富田さんと歩いてみた。



- ① 谷戸(武豊町)。丘陵地の小さな谷間を利用して開かれた水田。さまざまな生物の棲みか・ビオトープとして、また里山らしい景観の要素として欠かせないもの。
- ② 棚田(半田市)。水田、畦道、雑木林。これ全体を指して里地里山(さとちさとやま)とも呼ぶ。
- ③ 一本の柿の木が印象的な風景をつくり出す。
- ④ 左から フキ、ホイチゴの一種、シロツメクサ。畦道で出会った植物。(いずれも半田市の棚田)



富田さんおすすめ

常滑周辺 里山風景マップ

- ① 棚田風景 (半田市)
丘陵地に残された個人農家の棚田。
- ② 武豊町沓町田湿地
絶滅危惧植物「シロバナナガバノイシモチソウ」を含め7種の食虫植物が自生すると全国的に知られる湿地。(湿地保護のため見学は公開日のみ)
- ③ 椋原公園 (常滑市)
緑連なる里山の向こうに海をはさんで中部国際空港が。展望台からの眺めは絶景。バードウォッチングの愛好者にも人気。
- ④ 高砂山公園 (常滑市)
標高86mの高砂山。鎮守の森を中心に残された里山。
- ⑤ 小脇公園 (常滑市)
海岸沿いの森が特徴。遊歩道を歩くと、海が間近にせまってくる。
- ⑥ 武豊町自然公園
一步はざると谷戸の風景に出会える。
- ⑦ ウバメガシの林 (南知多町)



郷愁の、棚田風景

まずは、「知多半島でこういう風景が残っているのはかなりめずらしい」と言う棚田へ。畦道を歩くと、シロツメクサ、ヘビイチゴ、お馴染みの野の花が迎えてくれる。「カワラナデシコ、オミナエシなど秋の七草も咲くんですよ。でも圃場整備した土手には生えない、畦道って不思議なんです」。

里山の主役は雑木林だが、その裾野に続く水田やため池、草原も里山の大切な構成要素だ。「ビオトープって生物の棲みか全体のこと。だからここは里山ビオトープ。森、ため池、畦、田んぼ、多様な環境に適応した生物たちがいるんです」。

放置された森の行く末

「里山のことを考えるなら、まずは行ってみる。その場所の雰囲気を感じてみるのが大事」と富田さん。しかし今は里山といっても、その言葉から想像する絵本で見えるような森ばかりではない。光が差し込まず細い木がうっそうと茂り、人を拒む森。富田さんにしても「入ったら遭難しかけた」という里山も多い。

もともと知多半島の植生はシイ、カシ、ヤブツバキなどの常緑広葉樹だ。人々はその常緑樹を、農業や窯業を始めた千年以上前から継続的に手を加え里山の森「コナラやアカマツの森をつくりあげてきた。しかし放置されると、再び元の常緑樹が勢いを増す。人の手が加わらなければ、自然は己の力で姿を変える。「使わない森なら、元の植生に戻るのが自然と言う人もいるし、長い年月、人の働きかけて環境がつかられ、それに適応して生物が生きているのだから守った方がいいと言う人もいる。里山をとりまく問題って、すぐには答えが出ないんです」。

案内する人 富田 啓介さん

TOMITA Keisuke

1980年愛知県半田市生まれ。地理学・生態学研究者。名古屋大学大学院環境学研究科博士課程修了。自然が好きで高校時代から知多半島の野山を図鑑片手に歩く。その関心は、やがて人と自然のかかわりに広がり、人文・自然の両面から里山を解き明かすことをライフワークに。

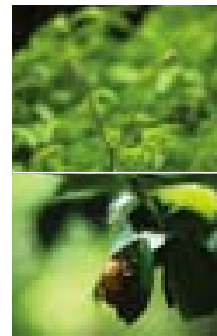




1

1 ウバメガシ

神奈川以西、海岸部の山の斜面に多く見られる。備長炭の原料としても知られる常緑樹。南知多町では原生林にほど近い林も見られる。(南知多町)



2 かつて人は日常的に森に入り、木を切り、切株から新しい枝を芽生えさせた。その様子を物語るコナラの木。(武豊町自然公園)

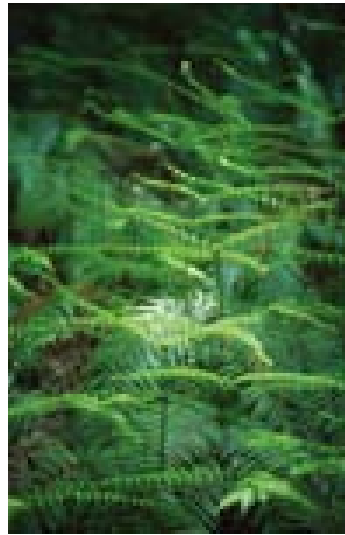


2



3 知多半島各地に点在していた湧水湿地。今は貴重な存在。その環境から特殊な植物が生息する。(阿久比町の板山高根湿地)

3



INAXライブミュージアム

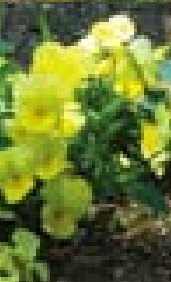
樹の声を聴き、樹に寄り添う

岡佐紀子さん



可憐で可愛い下草にも注目してほしい。

INAXライブミュージアムでは一年中、何らかの花が咲いている。オリーブ、ミカン、カキ、ザクロなど、実がなる植物もいっぱいだ。

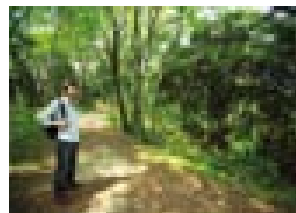


緑の中で、考えてみる

武豊町自然公園は里山体験におすめ場所だ。踏みしめる散策道の落ち葉が心地いい。伝説の天狗が持った「隠れ蓑」にその名が由来するカクレミノの葉を拾ったり、大きなウラジロを発見したり。散策道から一步はずれると、三方を山に囲まれた土地に水田を開いた「谷戸」に出る。圧倒的な緑を前に心が洗われる。「緑の中を歩くと心が癒される。いつ行ってもちがう表情があつて、ちがう発見がある」と富田さん。

富田さんは「固有名詞の自然保護」を見直すべきだと思っている。オオタカを守ろう、シデコブシを守ろう。そう声高に叫ぶほど、その固有名詞の背後にある小動物や植物、それを育む水や土、地域の自然全体へのまなざしと共感が遠ざかっていくような気がする。

里山は私たちにさまざまな問いかけをする。これからこの森を、誰がどう使うのか、どう生かすのか。私たちが自然とどうかかわろうとしているのか、その姿勢が問われている。



P.1写真：武豊町自然公園
樹木がほど良く伐採され、光が差込む状態の良い森。園内にはアカマツ、ヒサカキ、ヤマモモ、カクレミノ、コナラなどの木本種(高木～小高木)から下草まで100種あまりの野生植物が四季折々の表情を見せる。里山散策に最適。

「この木、かわいそう」の一言が始まり

2006年10月、「成長し続けるミュージアム」としてリニューアルオープンしたINAXライブミュージアムは、植栽についても同様に、植物が自然に大きく育っていくおらかな空間を考えていた。とはいえ、当初は入館者の対応に追われて、植物にまで目が行き届かなかったのが現実。そんな時、ミュージアムを訪れた岡佐紀子さんが、陶楽工房の横にあるエノキの大木を見て言った。「この木、かわいそう」。

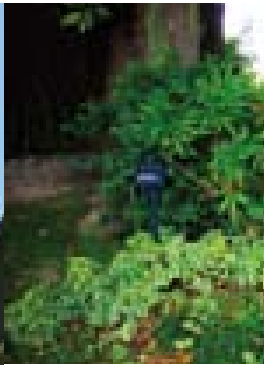
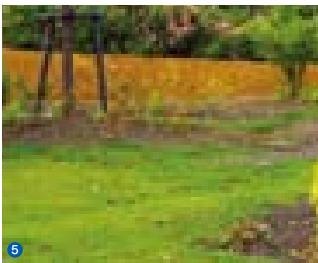
岡さんによれば、「芽吹きが遅く、芽吹いても葉の先端が縮れ、色も悪い。虫もついていたり、枯れ枝も多かった」。リニューアルに向けて駐車場への階段を新設するなど、確かにエノキの周りの環境は工事で大きく変わっていた。驚いたスタッフは岡さんに手入れを依頼した。
見た目の美しさじゃなく「その場が息づくこと」を考える

「エノキの根元は雨水の通り道になっていて、降った雨はエノキを潤さず、逆に表土が剥ぎ取られていたんです」。岡さんは根元の土を柔らかくし、低木と下草を植栽して雨水が浸透するようにした。今、

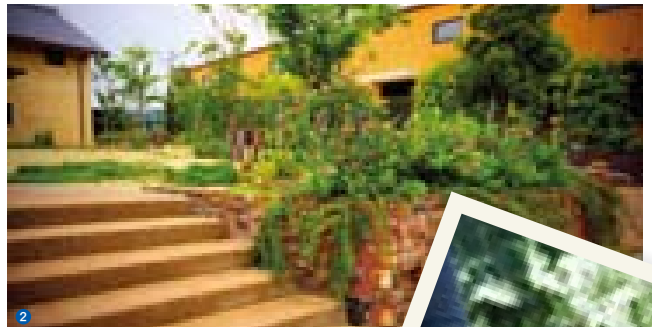


岡 佐紀子さん
OKA Sakiko

「小さい頃から植物が好きで、幼稚園に何の木が植わっていたかも覚えている」と言う。加えて「素材に触れながらものづくりをしていきたい」という思いから、造園の道に入って10年。2007年春からINAXライブミュージアムの緑が自然に育っていけるように、環境整備やアドバイスなどを担当。



① 下草が植えられ、元気になったエノキ
② 「雑草には雑草の役割があるんです。だから、クローバーもタンポポも自然に生えたらそのままに。」



③ 去年のこぼれ種から芽生えたノースポール、1年草のマリーゴールド、毎年顔を出す宿根草や常緑低木などのハーモニー。薫のある広場の花壇は1年を通してにぎやかだ。
④ ケヤキが葉を広げ、快適な空間をつくる休憩コーナー
⑤ 平坦だった地形を起こして高木の根元に応じた起伏をつけた。
⑥ 常滑の環境に合っているというタニウツギ

エノキは見違えるように伸び伸びと新緑を広げている。以来、岡さんはINAXライブミュージアムの緑を守り育むため、長野県安曇野市から定期的に通う。

「植物のある風景を見て、『何か殺風景』とか『おかしいな』と感じるところには絶対に原因があります。乾燥しすぎているとか、地中にコンクリートの塊があるとか。植物の周りに空気や水がうまく流れるように整えてあげれば、あとは植物の生命力で自然にきれいな風景になっていく。これは実感しています。だから、見た目の美しさから追っかけるんじゃなくて、どうやったらその場が息づくかをいつも考えて手入れをしていきたい」と、岡さん。

目の前の小さな緑は、地域の緑につながっている

「ミュージアムの庭も個人の庭も小さいけれど、それは地域の一部でもあるし、日本の一部でもある。このごろ、目の前の小さな緑とどう向き合うかは、自然とどうかわるかにつながっていて、それを調整することが庭づくりなんじゃないかって思っています」。

お祭り用の腹掛けに植木屋の通称「乗馬ズボン」と地下足袋。日本手ぬぐいをキリリと頭に巻いて、手際よく作業を進める。全体の植物の状態、今やらなければならぬ作業と手順は頭に入っている。「駐車場で車を降りた瞬間から、『いい感じ』とか『ホッとする』とか『きれいだな』とか、感じてもらえたら嬉しい」と、爽やかに笑う。